平成２６年度　全国学力・学習状況調査結果（小学校：国語）

１　調査結果の分析

小学校：国語Ａ

○　正答数７問以下（５０％未満）の割合が、９.８％であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「全国調査Ａ問題において５０％未満の児童の割合を１０％未満にする」を達成することができた。

○　正答数の分布を見ると、１２問から１４問（正答率８０％以上）の層が全国・県平均より多く、１１問以下の層が少ないことがわかる。基礎的な力について全体的な底上げができてきていると考えられる。

○　設問別に見ると、１５問中１０問において、全国・県平均を上回っている。中でも、故事成語の意味や使い方についての正答率が高い。

●　情景描写の効果を捉える問題の正答率が全国・県平均を下回っている。

●　漢字を書く問題３問のうち、２問の正答率が全国・県平均をやや下回っている。

小学校：国語Ｂ

○　正答数の分布を見ると、１０設問中９問から１０問（正答率９０％以上）の層が全国・県平均より多く、５問以下の層はやや少ない傾向にある。

○　設問別では、「課題解決のために、目次や索引を活用して本を効果的に読む力」を見る問いの正答率が全国・県を６ポイント程度上回っている。図書館を活用した授業への取組が少しずつ実を結んできているのではないかと考えられる。

●　「わかったことや疑問に思ったことを整理し、それらを関係づけながらまとめて書く力」を見る問いの正答率が全国・県平均を下回っている。

●　記述式の問題をはじめ、１０問中５問で無解答率が県平均を上回っている。

２　具体的な改善方策

小学校：国語Ａ

１　漢字や語句の定着のために

①　国語科の授業における系統的な指導を充実させる。

②　国語科の授業だけでなく、学校挙げて組織的に取り組む体制をつくり、継続的に取り組む。

③　漢字・語句に対する興味・関心を引き出し、伸ばす言語環境づくりに力を注ぐ。

２　情景描写の効果を捉える力をつけるために

①　文学的文章の単元において表現を比較する学習活動等を取り入れ、表現効果に目を向けた読み方を身につけさせる。

②　各校に配置している新聞等を活用して、表現の違いによる読み手の受け取り方の違いを実感させる学習活動を仕組む。

３　更なる基礎力の定着・向上のために

①　町で作成した「学習語彙集」及び、「掲示用学習語彙カード」を有効に活用し、学習語彙の定着を図る。

②　読みの力を更に伸ばすため、目的に応じた読み方を身につけさせる授業づくりに取り組む。

③　問題データベースを活用する。

小学校：国語Ｂ

１　「わかったことや疑問に思ったことを整理し、それらを関係づけながらまとめて書く力」を向上させるために

①　各教科において「わかったこと」「疑問に思ったこと」等を簡潔に書く習慣を身につけさせる学習活動を継続的に行う。

②　日常の授業の中で、前の人の発言をとらえ、それに付け加えて自分の意見とその根拠を述べさせるなど事柄を関連づけて表現する機会を増やす。

２　無解答率の減少のために

①　学校挙げて、「書くこと」に慣れさせる活動（視写・メモ・短作文　等）の充実を図る。

②　各教科において、自分の考えを書く場を設定した授業づくりに取り組む。

③　ゆるやかな条件をつけて文章を書かせる経験を積み重ねる。

３　更なる活用力の向上のために

①　図書館を活用した授業に更に積極的に取り組み、複数の資料を読み比べたり、必要な情報を読み取り、自分の表現に生かしたりする活動の充実を図る。

②　ペアやグループで読み取ったことや考えたことを自分の言葉で説明し合う場を設定し、自分の考えを再構成する経験を多く積ませる。

平成２６年度　全国学力・学習状況調査結果（小学校：算数）

１　調査結果の分析

小学校：算数Ａ

○　正答数８問以下（５０％未満）の割合が、６.３％であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「全国調査Ａ問題において５０％未満の児童の割合を１０％未満にする」を達成することができた。

○　正答数の分布を見ると、１７設問中、１６問以上の高位層の割合が４７.２％を占め、全国・県平均を大きく上回っている。また、１２問以下の割合は２３.１％と全国・県平均を下回っており、全体的な底上げができていると考えられる。

○　設問別では、１７設問中、１０問の正答率が全国・県平均を上回っており、特に「数と計算」「図形」「数量関係」に関する正答率が高い。

●　分数の大小に関する問題の正答率のみ、全国・県平均いずれも下回っている。

小学校：算数Ｂ

○　１３設問中５問ある記述式の問題の正答率が、全て全国・県平均を上回っている。算数科における説明力・記述力向上の取組が成果をあげてきていると考えられる。

●　正答数の分布を見ると、１３設問中８問以上の割合が、全国・県平均を若干上回っているものの、５問以下の割合がやや多い。

●　領域別で見ると、「図形」「数量関係」に関する問いの正答率が全国・県平均を下回っている。

●　１３問中６問で無解答率が県平均を上回っている。

２　具体的な改善方策

小学校：算数Ａ

１　更なる基礎力の定着・向上のために

①　指導事項を明確にした授業の更なる充実を図る。

②　町独自で実施している算数確認テスト（年４回）に向けた取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。

③　町で作成した「学習語彙集」及び、「掲示用学習語彙カード」を有効に活用し、算数科の学習語彙の定着を図る。

④　児童の思考過程が見えることを重視したノートづくりを進める。

⑤　問題データベースを活用する。

小学校：算数Ｂ

１　無解答率の減少のために

①　学校挙げて、「書くこと」に慣れさせる活動の充実を図る。

②　各教科において、自分の考えを書く場を設定した授業づくりに取り組む。

③　児童のノートを計画的に点検し、表現力を把握するとともに、個に応じた適切なアドバイスをする。

２　更なる活用力の向上の（二極化を防ぐ）ために

①　言葉（特に習得した学習語彙）、数、式、図、表などを用いたりして、自分の考えを書いたり、説明したりする活動を重視した授業づくりをする。

②　児童から引き出した数学的な見方・考え方を共有したり、吟味したりする場を意図的・計画的に設定する。

③　数値や文章を入れかえた多様な練習問題を繰り返し解かせる。

平成２６年度　全国学力・学習状況調査結果（中学校：国語）

１　調査結果の分析

中学校：国語Ａ

○　正答数１５問以下（５０％未満）の割合が、３.９％であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「全国調査Ａ問題において５０％未満の生徒の割合を１０％未満にする」を達成することができた。

○　正答数の分布を見ると、３２設問中２７問から３２問（正答率８４％以上）の層が全国・県平均より多く、２３問以下（正答率７２％以下）の層が少ないことがわかる。基礎的な力の定着について全体的な底上げができてきていると考えられる。

○　設問別で見ると、３２設問中２１問が全国・県平均を上回っている。中でも、「漢字の読み」「語句の意味」「文学的文章の読み取り」についての正答率が高い。

●　文脈に即して漢字を正しく書く問題（３問）は、いずれも全国・県平均を下回っている。

中学校：国語Ｂ

○　正答数の分布を見ると、９設問中４問以下の生徒の割合が、全国・県平均を下回っており、活用力についても少しずつ改善の兆しが見られる。

○　設問別では、９設問中８問が全国・県平均を上回っている。特に、記述式の問題については、無解答率が全国・県平均を大きく下回っており、正答率も高い。各校における日常の記述力向上の取組、図書館や新聞を活用した授業の取組が成果をあげてきていると考えられる。

●　表現技法に関する問いの正答率がやや低い。

２　具体的な改善方策

中学校：国語Ａ

１　漢字や語句の定着のために

①　国語科の授業における系統的な指導を充実させる。

②　国語科の授業だけでなく、学校挙げて組織的に取り組む体制をつくり、継続的に取り組む。

③　漢字・語句に対する興味・関心を引き出し、伸ばす言語環境づくりに力を注ぐ。

２　更なる基礎力の定着・向上のために

①　指導事項を明確にした授業の充実を図る。

②　学校挙げて「読む・書く」基礎技能（正確に読む・速く正確に書く等）の習熟を図る取組を継続する。

③　読みの力を更に伸ばすため、目的に応じた読み方を身につけさせる授業づくりに取り組む。

④　問題データベースを活用する。

⑤　基礎的事項の定着を図る家庭学習の課題を計画的に与え、習熟を図る。

中学校：国語Ｂ

１　表現技法に関する力を高めるために

①　文学的文章の単元や取り立て指導等で表現技法の種類や効果について丁寧に指導する。

②　学んだ表現技法を使って話したり、書いたりする学習活動を仕組む。

２　更なる活用力の向上のために

①　図書館を活用した授業に更に積極的に取り組み、複数の資料を読み比べたり、必要な情報を読み取り、自分の表現に生かしたりする活動の充実を図る。

②　説明する場を意図的に盛り込んだ授業づくりを推進する。

③　全ての教科において、多様な考えを引き出す学習課題を設定し、生徒個々に自分の考えをもたせる経験を多く積ませる。

④　ペアやグループで読み取ったことや考えたことを自分の言葉で説明し合う場を設定し、自分の考えを再構成する経験を多く積ませる。

平成２６年度　全国学力・学習状況調査結果（中学校：数学）

１　調査結果の分析

中学校：数学Ａ

○　正答数の分布を見ると、３６設問中２９問から３６問（正答率８１％以上）の層が全国・県平均より多く、２３問以下（正答率６４％以下）の層が少ないことがわかる。基礎的な力の定着について全体的な底上げができてきている。

○　設問別では、３６設問中３０問が全国・県平均を上回っている。特に「文字式」「方程式」「比例式」「一次関数」等の基本的な計算に関する設問の正答率が高い。

●　正答数１５問以下（５０％未満）の割合が、１３.１％であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「全国調査Ａ問題において５０％未満の生徒の割合を１０％未満にする」を達成できなかった。

●　図形の回転移動についての設問の正答率がやや低い。

中学校：数学Ｂ

○　正答数の分布を見ると、１５設問中７問以下の割合が全国・県平均を下回っており、活用力についても、少しずつ改善の兆しが見られる。

○　設問別では、１５設問中１３問で全国・県平均を上回っている。特に、国語同様、記述式の問題については、無解答率が全国・県平均を大きく下回っており、正答率も高い。各校の数学科における説明力・記述力向上を目指した授業改善が成果をあげつつあると考えられる。

●　Ａ問題と同じく、空間における図形の位置関係を捉える問いの正答率がやや低い。

２　具体的な改善方策

中学校：数学Ａ

１　正答率５０％未満の層を減らすために

①　授業形態の工夫やドリルタイム等を通して、個別指導の充実を図る。

②　町独自で実施している算数確認テスト（年４回）に向けた取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。

２　図形の回転移動の理解度を上げるために

①　いろいろな図形をコンパスと定規を用いて作図しながら移動させたり、切り取った紙を実際に移動させたりするなどの操作活動を多く取り入れる。

②　コンピュータ等を利用して、図形の移動の性質を理解させる場を設定する。

３　更なる基礎力の定着・向上のために

①　指導事項を明確にした授業づくりを徹底する。

②　町独自で実施している算数確認テスト（年４回）に向けた取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。

③　問題データベースを活用する。

中学校：数学Ｂ

１　図形分野の理解度の向上のために

①　操作活動を取り入れたり、コンピュータ等を利用したりすることによって、図形のそれぞれの性質などの定着を図り、それを根拠にして考えさせる活動を充実させる。

２　更なる活用力の向上のために

①　生徒の実態や教材の系統性をもとに、各学年の単元における身につけさせたい活用力を明確にして授業を構想する。

②　言葉、数、式、図、表などを用いたりして、自分の考えを書いたり、説明したりする活動を重視した授業づくりを推進する。

③　生徒から引き出した数学的な見方・考え方を共有したり、吟味したりする場を意図的・計画的に設定する。

④　数値や文章を入れかえた多様な練習問題を繰り返し解かせる。

⑤　活用力の向上を意図した家庭学習の課題を計画的に与え、生徒の思考の傾向や表現力の実態を把握し、授業づくりに生かす。

平成２６年度　全国学力・学習状況調査結果（学校質問紙）

１　調査結果の概要

小学校：学校質問紙

本町においては、調査対象学校数が７校と少ないため、単純に全国平均・県平均の割合と比較して特徴を述べることは難しい面があるが、主なものとして以下の点があげられる。

○　全体的に見ると、肯定的な回答をした学校の割合が県・全国を上回っている項目が多い。しかも、４５項目で全校が肯定的な回答をしている。

○　頻度について差異はあるが、全校で放課後を利用した学習サポートを実施している。

○　極小規模校を除き、全ての学校において算数科で習熟度別指導を取り入れ、個に応じた指導を行っている。

○　「校内研修」に関する問い、及び「言語活動・教育目標・学力・学校運営に関することについて全教職員で取り組んでいるか」の各問いには、全校が肯定的な回答をしている。

●　「学級やグループの話し合い活動で、児童が自分の考えを伝えたり、深めたり、広げたりすることができているか」の問いに肯定的な回答をした学校は４校に止まっている。

●　「国語や数学の授業において、コンピュータ等の情報通信技術を活用した授業を行っているか」の問いに肯定的な回答した学校は国語１校、算数２校である。

中学校：学校質問紙

本町においては、調査対象学校数が６校と少ないため、単純に全国平均・県平均の割合と比較して特徴を述べることは難しい面があるが、主なものとして以下の点があげられる。

○　全体的に見ると、肯定的な回答をした学校の割合が県・全国を上回っている項目が多い。しかも、４０項目で全校が肯定的な回答をしている。

○　日数について差異はあるが、全校で長期休業を利用した学習サポートを実施している。

○　「校内研修」に関する問い、及び「言語活動・教育目標・学力・学校運営に関することについて全教職員で取り組んでいるか」の各問いには、全校が肯定的な回答をしている。

●　「教科の指導内容や指導方法について近隣の中学校と連携を行っているか」の問いに肯定的な回答をしたのは４校に止まっている。

●　「家庭学習の課題の与え方や内容」に関する問いに肯定的な回答をした学校は半数である。

●　「国語や数学の授業において、コンピュータ等の情報通信技術を活用した授業を行っているか」の問いに肯定的な回答した学校は１校のみである。

２　玖珠町の学校質問紙調査の結果をふまえて

「校内研修」に関する問い、及び「言語活動・教育目標・学力・学校運営に関することについて全教職員で取り組んでいるか」の各問いに、町内小・中学校全校が肯定的な回答をしていること等から、各学校で知・徳・体バランスのとれた児童生徒の育成に向けて、組織的に取り組んでいることが見て取れる。

また、放課後や長期休業を利用した補充学習や習熟度別指導をはじめ、個に応じた学習指導に積極的に取り組んでいることも、調査結果からはっきりとうかがえる。

今後の主な課題は、次の３点である。

１　思考力・表現力の向上を目指した更なる授業改善

生徒自らが調べ、整理し、発表・交流する問題解決的な展開の授業を積極的に行う必要がある。その際、特に、児童生徒個々の多様な考えを引き出す学習課題の設定とそれぞれの考えを比較・吟味する話し合い活動の質の向上に留意しなければならない。

併せて、コンピュータ等の情報通信技術の活用も心がけておきたい。

２　家庭学習の充実に向けた学校挙げての取組の強化

学校挙げて家庭学習の習慣化や充実を図る取組（例：家庭学習の方法の指導、家庭学習の記録やチェックの工夫、計画的・意図的な家庭学習用の課題の提示、家庭学習強化週間の設定等）を行うことによって、家庭学習の質・量ともに向上させる必要がある。特に、中学校においては、教科間の連携を確実に行い、家庭学習の課題のあり方についての共通認識をもって提示するよう配慮することが肝要である。

３　学校間の連携の強化

小中連携、また、同校種間の連携を深め、９年間を通して共通して指導する内容の焦点化や有効な指導方法の共有等をすることによって、教職員の更なる指導力の向上を図りたい。

平成２６年度　全国学力・学習状況調査結果（児童・生徒質問紙）

１　調査結果の概要

児童質問紙

○　「読書が好きである」に肯定的な回答をした児童は、全国・県平均を１０ポイント程度上回っている。また、１日に１時間以上読書する児童の割合も、全国・県平均を上回っている。

○　「朝食」「就寝時間」「学校のきまり」等、基本的な生活習慣に関する問いに肯定的な回答をした児童が全国・県平均を上回っている。

○　５年生までの授業では、「話し合い活動」「目標の提示」「振り返りの活動」ともに、よく行っていたという問いに対する肯定的な回答が、いずれも全国・県平均を上回っており、先生方の授業改善の取組が児童にも伝わっていることがわかる。

●　「家で授業の予習・復習をしているか」に肯定的な回答をした児童は、全国・県平均を５～１０ポイント程度下回っている。また、平日１時間以上家庭学習をする児童の割合も全国・県平均を下回っている。

●　平日にテレビ等を視聴する時間が３時間以上という児童の割合が、全国・県平均を１０ポイント程度上回っている。

●　「自分にはよいところがあると思うか」に肯定的な回答をした児童は、県・全国を７ポイント程度下回っている。

生徒質問紙

○　「今、学習していること（国語・数学・総合的な学習）が将来役に立つと思う」という問いに肯定的な回答をした生徒がいずれも全国・県平均を大きく上回っている。

○　平日３０分以上読書する生徒の割合が、全国・県平均を８ポイント程度上回っている。

○　「朝食」「就寝時間」「学校の規則」「家の人と学校での出来事についての会話」等に肯定的な回答をした生徒が県・全国を上回っており、落ち着いた生活を送っていることがうかがえる。

○　「将来の夢や目標を持っている」「人の気持ちがわかる人間になりたい」「人の役に立つ人間になりたい」に肯定的な回答をしている生徒が県・全国平均を上回っており、物事に対して前向きな姿勢が受け取れる。

●　「自分の考えや意見を発表する」・「自分の考えを他人に説明する」ことに苦手意識をもっている生徒の割合が全国・県平均を上回っている。

●　小学校と同様に、平日にテレビ等を視聴する時間が３時間以上という生徒の割合が、全国・県平均を７ポイント程度上回っている。

２　玖珠町の児童･生徒質問紙の調査結果をふまえて

児童生徒のほとんどが、基本的な生活習慣を身につけ、落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送っていることが見て取れる。

また、読書に関する回答結果から、本町が重点として取り組んでいる図書館活用教育の充実についても、少しずつ成果をあげてきていると考えられる。

小学校においては、先生方の授業改善の取組が児童にも実感として伝わっている点、中学校においては、キャリア教育を核として学校でのあらゆる教育活動が将来につながっているということを生徒に実感させている点が特長的である。

一方、今後の課題として、次の３点に力を入れる必要がある。

１　自己肯定感の醸成

日々の各教科・領域の指導、生活指導や学級経営等において、児童生徒に自信をもたせたり、自分のよさに気づいたりする活動を意図的に取り入れること（例：自己肯定感の醸成に重点を置いた年間指導計画の作成等）や家庭や地域との連携の充実を図ることによって、児童生徒の自己肯定感を高めていく必要がある。

２　家庭学習の充実

家庭での時間の使い方について、児童生徒個々の実態を丁寧に把握し、家庭と連携しながら個別に指導することと併せて、学校挙げて家庭学習の習慣化や充実を図る取組（例：家庭学習の方法の指導、家庭学習の記録やチェックの工夫、計画的・意図的な家庭学習用の課題の提示、家庭学習強化週間の設定等）を行うことによって、家庭学習の質・量ともに向上させる必要がある。

３　表現力の向上

学校における教育活動全体を通して、児童生徒個々の表現力を向上させる取組（例：表現する中身をもたせ、説明する場を設定した授業改善、行事等における表現の場の設定と丁寧な事前指導等）を充実させること、また、互いの考えを聴き合い、認め合う学校・学級の風土を創り上げていくことによって、表現力の更なる向上を目指す必要がある。